

朝のこない夜はない

合格ごうかくも不合格ふごうかくも徳次とくじ第だい

徳とくを積つみ重かさねましよう

山首 鈴木正修



功德と罪障

人生はやり直せる

今日は受験の話をしようと思います。

私が受験生だった頃、入江伸という方が主宰する「入江塾」がテレビや雑誌で

よく取り上げられていました。そこはスパルタで、少しでもできないと「ばかもの！」と叱られ、時には手をあげられることもありました。気の弱い生徒は泣きながら勉強をしていました。しかし、入江先生の熱血指導のおかげで多くの生徒

が「灘」や「ラサール」といった超一流の進学校に合格してゆきました。有名な芸能人のラサール石井さんも入江塾の出身です。

石井さんがラサール高校に合格した時、入江先生の所にお礼の挨拶に行くと先客がいました。その生徒は不合格の報告に来ていたのです。普通不合格の生徒は電話ですませるものです。

「先生、申し訳ありませんでした。あん

なに先生に一生懸命教えてもらったのに、

私は合格することができませんでした」

「何を言っているんだ。受験に落ちたことぐらいはいたしたことないぞ。人生はそんなに甘くないというが、実は人生は甘んだ。人生は何度でもやり直しができるんだ。試験に一回落ちたことぐらい屁でもない」

そんな会話を交わす二人を見ていた石井さんは、恐かった入江先生のことが大好きになったそうです。

入江塾の教育のすばらしい一面を垣間見る思いがいたします。

— 守護を受ける —

受験に当たっては、多くの方が合格祈願のお守りを申し込まれます。特別な力を持った何かに頼りたいという思いが、どなたの心にもあるのだと思います。また「どうしたら受かりますか」とよく尋ねられます。私自身も受験の時、ある人と同じように聞いたことがあります。するとその方が「これから言う、三つのこととをしなさい。一つ目は、毎晩お父さんの靴を磨くこと。二つ目は、自分が使った食器・弁当箱を自分で洗うこと。三つ目は、玄関と庭先の掃除をすること。約

東そくでできますか」と言いわれました。父ちち親おやを敬うやまい、母はは親おやに感かん謝しやする心こころを持もちなさ
いぐと教おしえて下くださったのだと思おもいます。
謙けん虚きよに徳とくを積つんでゆけば、仏ほとけさまの守しゆ
護ごを受けることがでできるに違ちがいありませ
ん。

—— すべては徳とくしだい ——

中国ちゆうごくの明みんの時代じだい、袁えん了りやう凡ぼんという人ひとが書か
いた『陰いん鷲しゆ録ろく』には「功く徳とくを積つむと必かならず
良よいことがある。罪つみを作つくれば必かならず悪わるいこ
とがある」ということが全ぜん編べんに渡わたって書か
かれていいます。

その中なかに「試し験けんの合ごう否ひも功く徳とくによる」
とありあります。

中国ちゆうごくには昔むかし、科か挙きよという官かん吏り登とう用よう試し験けん
がありありました。これの最さい終しゆう試し験けんに一いっ番ばんで
合ごう格かくすると将しょう来らいの総そう理り大だい臣じんが約やく束そくされる
など、その合ごう否ひで将しょう来らいが決きまるといいった
ものものででした。

その試し験けんを受うけた張ちやう畏い巖がんという人ひとが
まました。ととても勉べん強きやうがあらあてて才さい能のうもああつ
たので、間ま違ちがいなく一いっ番ばんで合ごう格かくでできるだ
ろろうと本ほん人にんは思おもつていいました。とところが
発はつ表ひやうの時とき、合ごう格かく者しやの中なかに名な前まえがありありませ
ん。そそこで張ちやう畏い巖がんは「試し験けん官かんは目めが横よこに

ついでに吾輩の文章の卓越していることがわからんとは、よくよくの無学文盲の連中だ」と、場所柄もわかまえず言い放ちました。すると、その傍らにたまたまいた道教の行者が、その様子を見てクスクスと笑いました。張畏巖が怒って「おぬしは一体何者だ。何の理由があつて私を笑うのだ」と言う。「あなたのような、下手な文章を棚に上げて試験官が悪いなどと言う人がおかくて私は笑つたのですよ」と答えました。それを聞いてますます怒り「おぬしは私の文章を見もしないでどうしてそんなこ

とが言えるのだ。失礼だぞ」と言う。行者は「まあ、気を静めなさい。私はこういうことを聞いています。すべて文章でも絵でも、心の表現であるのだから、心が和平であればその文章も高尚で品格を具備したものになる。しかし、あなたのように傲慢な心の人が書いたものは、自然にその心が表われたものになるはずだ。試験官はあなたの文章を見ただけで気分が悪くなつたであろう。私は、あなたの文章を直接見ていないがわかる。あなたの今の心の状態でいい文章が書けるはずがない」と言いました。

張畏巖も偉いもので自分の過ちに気づき、今度は謙虚に「ではどうすればいいのですか」と尋ねました。すると行者は「試験に合格するも落第するも、一定の運命関係によります。あなたがこの度、合格することができる天命にあったならば、文章が少々下手でも合格したでしょう。落第の天命にあるならば、文章が巧みであつても駄目です。すべては天命にあつて、文章の巧拙は二の次。真に合格したいと思うのなら、まず天命を移し替えることから始めなければなりません」と言いました。そう言われて張畏巖は

「試験の合格・不合格も、世に出て出世するもしないも天命によると言うのなら、今度の私の不合格は天命がなかったということであきらめましょう。しかし、この恵まれない天命をどうしたら恵まれたものに変えることができるのですか」と聞きました。すると「ただ今より、今までの不平不満の心を打ち捨て、新たに善いことを力強く行ないなさい。陰で徳を施し、謙虚に身を慎んで生きていきなさい。そうすれば思うがままの幸運に恵まれるでしょう」と言われました。そこで張畏巖が「御慈教有難うございます。し

かし私は貧乏書生で何も持っていないから善事陰徳を積みたくてもできません」と言う。「陰徳を施すといつても、必ずしも財物を施すことばかりとは限りません。善事陰徳は、心の用い方次第です。心中、常に善い念を抱いて行なう行為はすべて、無量無辺の功德が得られるに違いないありません」と言われ、「わかりました。今度の試験まで命の限り頑張ります」と決意しました。

次の試験は三年後です。それまで毎朝水行をし、心身を清めて小悪を畏れ、小善を軽んぜず、徳行にはげみました。三

年が経ち、もうすぐ試験という時に夢を見ました。大きな高い屋根の建物に入っ
て行くと、中に分厚い名簿が一冊ありま
した。「これは何ですか」と近くにいた、
衣冠を正した人に聞くと「これは試験に
関する名簿です」と言われました。その
中を見て「名前と名前の間に空いている
行があります、これはどういうことで
すか」と重ねて聞くと「これは天の神様
の記録で、人間の功罪を記録したもので
す。貴殿が見たのは高等文官試験の合格
候補者名簿です。天上では日々、人間の
行動すべてを記録しているのです。この

試験しけんに關かんしては、三年ねんに一度ど、それを総そう括かつしています。ずっと徳とくを積つみ、罪つみを作つくらなかつた人ひとは合格者ごうかくしゃの所ところに名前なまえがあり、行ぎょうが空あいているのは、徳とくを積つんでいたけれども途中とちゅうで挫折ぶつせつしたり、罪つみを作つくってしまつたから名前なまえが消きえたのです。この一番最後ばんさいごの百五行目びやくごぎょうめに今度こんど、貴殿きでんの名前なまえが入はいるでしょう。三年間ねんかんよく徳とくを重かさねてこられた。これよりなお自重自愛じちよしじあいするよう「…」と言いわれました。

そして試験しけんを受け、発表はつぴやうを見みに行いくと合格ごうかくしていました。それも、掲示板けいじばんの百五行目びやくごぎょうめに名前なまえがあつたのです。誠まことに不ふ思し

議ぎな出来事できごとでした。

別べつの本ほんにはこんな話はなも載のっています。

ある科挙かきよの試験官しけんかんが一枚まいの答案とうあんを見て、出来できが良よくないからバツをつけようとすると、急きゆうに「不可ブコウ（いけない）」という天てんの声こゑが聞きこえました。何度なんどバツをつけようとしても「不可ブコウ」と聞きこえてきます。そこで「この答案とうあんにバツをつけてはいけないのか」と思おもい、合格ごうかくにしました。

その後ご、その答案とうあんを書かいた人ひとがどんな人物じんぶつかと思おもい会あつてみると、彼かれは副業ふくぎやうで漢方かんぽうの医者いしやをし、貧ますしい人ひとからはお金かねを

取らずに診療し、助けていました。試験官は「こういう功德を積んでいるから天が彼を通せと言われたのだな」と理解しました。

また逆の話もあります。

良く出来た答案だったので、ある試験官が少し気になった所にチェックをしました。すると上級の試験官から「これは良く出来た答案だからチェックをする必要はない。合格だ」と言われました。そこでチェックを消そうとしたのですが、

答案がどんどん汚れていってしまいました。科挙の試験は、汚い答案は不合格と決まっていたので、良い出来でしたが不合格になってしまいました。後で、その受験生は非常に素行の悪い人物だったということがわかったそうです。

勉強をしなければ試験には合格できませんが、徳を積んで諸天の守護を頂くことが、それ以上に大事なことだと思いません。